

研究・調査報告書

報告書番号	担当
178	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳) A longitudinal study of risk factors for incident drug use in adults: findings from a representative sample of the US population. 成人における薬物使用に対するリスク因子の長期間研究—米国民の代表的なサンプルからの知見	
執筆者 Harrington M, Robinson J, Bolton SL, Sareen J, Bolton J.	
掲載誌 Can J Psychiatry. 2011 Nov;56(11):686-95.	
キーワード リスク因子、アルコール、薬物、社会統計学因子	
要旨 目的： 直近薬物を使用していない人におけるベースラインにおける精神障害と他の交絡因子の関係を検証する。これらを薬物依存の潜在リスク因子という観点で3年フォローアップで検証する。 方法： NESARC(アルコールと関係する状況に関する国立疫学調査)第2版(2004-2005年度版、n=34653)のデータを用いて、特定のコミュニティに属する成人における精神疾患について長期間にわたり国民調査を実施した。調査した集団は、不法薬物もしくは処方された薬の誤った使用が第1版(2001-2002年度版)で報告されていない参加者で構成された。第2版(n=1145)で初めて薬物を使用した経験のある参加者と引き続き薬物を使用しなかった参加者(n=25790)を比較するために、第1版における交絡因子であった社会人口統計学因子と精神障害(アルコール障害とニコチン依存症)、幼少期の不遇、家族の薬物使用障害歴を考慮したロジスティック回帰分析を行った。 結果： 幼少期の不遇は薬物使用のリスク増大と関連しており、近親者にアルコールや薬物で問題を抱えていた人がいた。幼少期の不遇と薬物常用する家族歴、先在する気持ちの障害(オッズ比 1.31 ; 95%CI : 1.04-1.64)、人格障害(オッズ比 1.82 ; 95%CI : 1.50-2.20)、ニコチン依存歴(オッズ比 1.41 ; 95%CI : 1.09-1.83)、アルコール乱用・依存(オッズ比 1.96 ; 95%CI : 1.48-2.60)はフォローアップ時点で新たな薬物使用開始と独立して関連していた。 結論： 特定の精神疾患は、以前薬物の使用を思い止まっていた参加者において薬物使用のリスクを独立して増大させる。幼少期における不遇と近親者によるアルコールや薬物における問題は全てにおいてではないが、これらの関係のある程度説明できる。	